

伝えたい

戦後80年
過去から未来

記憶を語り継ぐ

4

東京都の深川で生まれ育ちました。家は川沿いにあり、うちも隣近所もみんな材木屋。7人きょうだいの長男で、小さい頃から友達と川遊びをして過ごし、私は丸太乗りが得意でした。戦争が始まると材木屋も軍に統制され、多くの店は自由に商売ができなくなりました。しかし私の父は軍の出入り商人になったため、ある程度自由に材木を扱えたようです。材木は当時、防空壕を作るためにも入り用でしたから、警察署長や将校に差し入れると喜ばれました。そのような裏取引を通じてか、世の中が食料に困っていた頃でも私の家には白米や砂糖がありました。

浅野昌平さん 93 下諏訪町東赤砂

た。私は子どもながらに裏取引をする父親は悪いことをしていると、反感を持っていた記憶があります。

いつしか東京にも空襲警報が出るようになりました。米軍のB29が飛んで来た時の、腹の底まで響いてくるような、グウウン…という不気味な音をよく覚えていいます。

東京大空襲が起きた1945年3月10日には、きょうだいは先に疎開しており、東京には父と私が残っていました。焼夷弾

は町を囲うように落とされまして、よく覚えているのは、私はちを取り囲む、炎と煙の入り混じった、絵の具を何重にも塗ります。



悲劇を忘れないようつないでいく必要性を語る浅野昌平さん

炎と煙の壁迫る中「突っ張り」決断

商売が終わったと思ったのが、「あつ」と腰が抜けたような音を出しました。炎が静まる、マネキンのように肌がパンパンに張った死体が積み重なっていました。戦争が終わって、私は「だまされたんだなあ」と思いました。日本は勝つと信じ込ませる世の中の流れに、だまされた。皆さんは世間に流されず、自分で納得した道に進んでほしい。

ウクライナや中東の夜空にミサイルが飛んでいる映像を見ました。私はB29のあの音を思い出して、「嫌だな」と思いました。夜空は花火を思えるところだ。世界中の平和な夜空を守るために、日本人は頑張らなきゃいけない。経験した悲劇をつないでいかなければならないと思います。(聞き手・作壇囃太)

固めたような、重みと厚みのあるどす黒さ…。炎は風に押し流され、西へ東へと人々を追いつけてます。逃げ場を失って川に飛び降りた人々は丸太につかまりますが、低く這うように吹いてくる炎で手を焼かれて溺れていきます。

炎と煙の壁が迫る中、父は私に向けて「昌平、このままだら逃げ場が無くなるな」と言いました。そして私の手を引き(ここだけは確かに父を尊敬しているところ)です「突っ張り」。逃げて来る人の波から反対に走り、炎の中に飛び込みました。炎を抜けて振り返ると、町は燃えていました。父は自分の